

狐崎と嘉瀬

筆記者 秋元 惣之進

嘉瀬の県道を五所川原方面に向う村はづれ、東側を見ると、大きな嘉瀬溜池（清久溜池）。又少し行くと東側に長富溜池がある。西側を見ると、広々とした津軽平野の一面の田圃であるが、よく気を付けて見ると、溜池と溜池の中間に、大きな平坦地の出崎がある。

広々とした出崎には、今も松林が青々と繁茂林立していて、そこが昔から、俗に言われてきた狐崎である。

◎ 薬師神社の前身磯崎神社は狐崎にあった

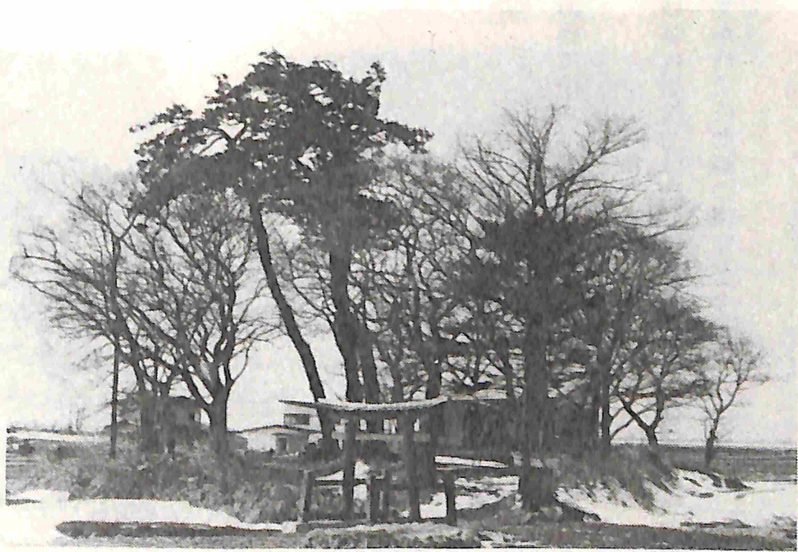
或る一日、現在八二才になる吉崎新八郎老翁から、嘉瀬史の伝説やら、狐崎の由来や、先代からの語り伝えをお聞きした。

嘉瀬近辺の田圃は往古の昔、十三瀨につらなる拡大な瀨であり、往時の昔、瀨辺の水深は、一米内外の浅い瀨で、当時の人は、魚介類を獲り常食として、毎日瀨辺で丸太舟をあやつり、狐崎を漁崎としていたといわれている。

湖面を、ここかしこ往来する丸太舟は、魚介類を求めている。

丸太舟一杯に大漁し、満顔で帰途の途中狐崎に寄崎し、狐崎の丘陵で一休みするのが常であるが、舟に、魚介類満載のはずなのに、何時の間にか魚介類は姿を消して一匹も無くなるのが常であった。

磯崎宮 = 通称薬師様



或る日、あまりの不思議に村人が、何時ものように丘で一休みしながら、岸辺を見ていると、数百匹の狐が群集をなし、吾れ先にと魚介類をうばい競い、口先に魚をくわい去る姿を見て、恐怖心で驚いた村人は、此処は狐の住家の崎だと呼びながら、一目散に村に逃げ返ったところから、狐崎の地名が、できあがったという。

往時の狐崎沿岸は、介類や雑魚の宝庫で、生活の糧となる魚庫の有難さに村人は、狐崎の突端に神石の祠 建て祀り、漁獲祈願所とした

と伝えられ、神石を磯崎神社と命名、今は嘉瀬上鍛冶町薬師社境内に接し合祀している。

また狐の群は数十年前迄生存していたという。昔は日暮になると、祝言や祝い事があって、長富方面から金木に帰る人、金木嘉瀬から五所川原長富に向う人々が、狐に化かされて、手土産品や、魚をとられる恐怖の場所でもあったと、今でも村の語り草と残っている。

◎ 狐崎住居の人々

約百五拾五年前（慶応三年11西暦一八六七年ごろ）に、狐崎に四五軒の人家があった。吉崎翁は記憶がうすれたがと云って、佐野平内兵衛、木下弥左衛門、秋元定之丞、山中久兵衛、斉藤浜九良の代名をあげてくれた。

佐野平内兵衛、斉藤浜九良は約七三年前頃（明治四二年ごろ）北海道に渡ったというが、あとの山中久兵衛、秋元定之丞、木下弥左衛門は何処に去って行ったのか詳らかでない。

◎ 墳墓か人骨が出た

昭和三六年頃、嘉瀬雲雀野地区農道改修（カサモリ）工事の時、狐崎から土砂を採取運搬した際に、天明〱天保の大飢饉の人骨か、それとも往古の原住民の人骨か、また慶応〱明治にかけて居住して居た家族の墳墓の人骨か、二〱三体が掘出され、工事にあたっていた人達を驚かせたといえます。

また狐崎は、数十年前まで、蛇穴が無数にあって、蛇が群をなし、数十匹・数百匹も所々に蛇の塚があったそうだが、今では開墾整地さ

れ、畠地となっている。

◎ 狐崎は原住民の住居跡でないか

昔は道路も整備されて無く、人の歩く道は山根沿いに、小高い個所を選び、道しるべに歩きました。北辺の最果て津軽にも次第に人影の往来がはげしくなり、土地も開拓され、丘陵平坦地に住いようになり嘉瀬の集落もできてきたのでしよう。

今から約七九三年ごろの文治五年から、嘉瀬や狐崎に、京都や大阪を追われて、京の都人が北上、十三から内陸に入り、狐崎を陰れ里として住んだと想像されます。

狐崎の畠の中から、石器や土器が所々から出てきます。私達の先住民であった蝦夷人の住居跡でもあったろう。

今から一三二四年前の斉明四年、阿部比羅夫が日本海を北上して蝦夷を討伐しており、また約七九三年前の文治五年十三に藤原秀栄が福島城を築いており、この頃から狐崎や嘉瀬地区にも住居する私達の先祖も多くなったのではないかと想定されます。

◎ 嘉瀬地区の新田開発の拠点狐崎

藩政時代に入って、道路も拡張整備された。それまでは下の切街道が主要道であった。今から三六七年前までは（元和年間まで）茫々たる萱原で、北辺の原野に三五八年前飯詰以北に集落らしい集落は、ほとんどなく、散在的に寄宿する人家があっただけだろう。

新田開発を進めるため、四代藩主信政の時代に入ると、人寄せ役をもうけて、秋田・山形・越後より移民を募い、茫々たる萱原の湿地を

開墾奨励、嘉瀬地区は狐崎方面の湿地帯（サルケ地帯）より水田の開拓が進められ、狐崎近辺の低湿地帯も水田に変った。

狐崎は、今から約三二一年ごろ（寛文一年ごろ）から開田事業が行なわれ、実に拾数年の長い年月でもって、永宝年間には、嘉瀬の水田約百七拾一町歩、又家数百六拾二軒とあり、嘉瀬の開田事業の時は、狐崎に開田作業現場の作業小屋を建て、寝泊りしながら、開田に汗を流す明日を夢見て働らき、酒におぼれ去る者、開田の志しを捨てる者と、そこには人間模様のうず巻があったことであろう。

◎ 狐崎は金木に至る主要道であった。

嘉瀬新田開発は狐崎地区より着工したもので、道路の往来は非常に困難だったことだろうと思う。と言うのは、飯詰・中柏木・喜良市通りが下の切街道（山根沿い）で、嘉瀬は下の切道よりはづれて分岐道で結ばれ、嘉瀬古町に出る街道は、下の切街道中柏木から狐崎の突端に出て、狐崎から古町、古町から八幡宮西を通り、金木村に出たという事で、狐崎は昔から金木に至る主要道のところに位置していたのである。

◎ 清久溜池

藩名により狐崎地区の開田成就するも、この地帯の水田は水不足に悩まされ、苗を植付けても、水不足で稲作は良好でなく、ここを開田した人々は泣くにも泣けず、離農する者次第に出始め、廃田が多くなった。それを見兼ねた持の新田開発奉行、平沢三右衛門は、角田弥六藤田権左エ門に、廃田復興を命じ、再開拓に努力させたが、悩みの種

は水不足であった。九代藩主寧親は、平沢三右衛門を新田開発奉行に登用、開発奉行に任命された平沢三右衛門は水不足に行詰り、秋元清久、角田弥六、其田弥太郎、藤田権左エ門を寄せ集め協議の結果、嘉瀬・長富・藤枝の各地に水田かんがい用の溜池を築堤することとなった。

嘉瀬地区は秋元清久が溜池工事の任に命ぜられ、秋元清久は藩に、嘉瀬溜池築堤工事を願出、許可され、今から約一七七年前（文化二年ごろ）西暦一八〇五年）秋元清久は築堤工事に取りかかりました。

当時嘉瀬溜池附近は浮洲（浮島）だったので、想像以上に工事は難儀したことと思います。苦勞の甲斐あって、文化五年（今から約一七四年前）十二月、嘉瀬溜池築堤工事完成。平沢三右衛門は秋元清久の功をたたえて藩に具申、藩では清久に苗字帯刀を許した。（当時平民百姓には名前だけで、苗字は無かった）。溜池が清久の名前の如く、清く永久に水が満杯で、美田に水が引かれるようにと、清と久をとり、清久溜池と呼ぶようになったのです。

また、長富溜池（二ノ沢溜池）は、清久溜池より十九年遅れて、文政七年（今から約一五八年前）其田弥太郎という人が長富溜池堤防を築きました。

嘉瀬溜池、長富溜池築堤以前は、狐崎から古町・金木に出たものが堤防を通路にしたので、長富部落・長富溜池堤防道路・嘉瀬溜池堤防道路から現在の上鍛冶町に出ることができるようになりました。

五所川原・嘉瀬・金木に至る現在の道路が完全に着工整備されたのは明治時代に入った、四十三年にできあがったと言われています。

◎ 八幡宮西側古道は年貢米運搬の道

嘉瀬・長富溜池も出来、水不足も解消され、永年の歳月を費す。ようやく湿地を開拓、美田となったが、藩制時代の百姓は苦勞と難儀の連続で、春先から田植、稲刈り収穫と作ったお米を、お上（藩）へ、御用米（年貢）として納めねばならなかった。

御用米は、俵は勿論、充分に白米に精選し、粗米一粒あっても、また稗目を増し、御用蔵（現金木病院跡地）に納めねばなりません。一口に御用米を納めると云っても金木まで運ぶのは大変なことであつたでしょう。御用米を納めるため八幡宮西側、坂道まで行くと、力持の大男や、豪傑男が、弱い者を虐め、御用蔵までは普通の人々はとても運ぶことができないので、腕力の強い人を雇って、御用米を納めに行くのでしたそうです。

また御用蔵に着くと、下ッ葉の役人の気嫌を損じないようにするのが、これまた大変だったそうで、悪い役人にあたると、俵が悪い、米の質が悪いとなんだかんだと、百姓は無事に納められるとは限らないのだ。そこには酒や肴、珍品金銭などの賄賂が横行する事態が生じ、何時の世にも百姓は社会の下敷で、奴隸的存在であつた。

明治時代に入り、廃藩置県が敷かれる一年前（明治四年）金木代官所廃止、平民に苗字が許されたのである。

吉崎新八郎老翁は、大昔からの嘉瀬についての古事や、農村生活を語ってくれたが、次の機会にまた記述したい。

薬師神社前身磯崎神社が狐崎にあった考証

奥羽平泉藤原氏の一族藤原秀榮が康治年間西暦一一四二年から十三に住し、東日流六郡の内、外三郡を領す。海運、農耕、社寺仏閣を興すとされ、今も地名に残っている藤崎・妙堂崎等と、十三内海（十三浦）の十と三の浦々に存在した出崎であつたと云われる。

神仏に帰依する秀榮、東日流安泰海の守り神として、出崎に磯崎宮を勧進したと伝えられるところから、我が郷土嘉瀬の狐崎も、内浦の出崎の一つとして磯崎神社が安置されたことは認証できる。

但し、天正十六年（西暦一五八八年）久慈平九郎こと大浦為信津軽全土を侵略統一し、東日流安東・阿倍一族ゆかりの古事業歴・神社仏閣、三戸南部氏に縁故のある事物をことごとく焼却没収し去つたと云う、勝者のおきてに、狐崎にあった安東ゆかりの磯崎宮も、心ある村人の手によって、薬師神社の内神として合祀しただろうと考証される。

阿部比羅夫・坂上田村麻呂が東日流の浦々に神社仏閣を勧請したことはいつわりで大和人を偉人に仕立てあげた一つの伝承に過ぎない。津軽の村々に鎮守様として八幡宮が多くあるが、これは鎌倉幕府時代の地頭代官である鎌倉御家人による幕政の威武によるものであり、おそらく狐崎にあった磯崎宮は神仏混合の祠であつたろう。

（編集部）

庚申縁起

佐野 洪 編

『庚申』の日を庚申様の日という。『庚申の日』は六十一日に回ってくるから年六日あることになるが、閏年は七回となる。庚申の日には、庚申講の人達が宿舎に集り、夜になると青面金剛のお掛図を飾り。シトギとお神酒を供へ、この夜は寝ないで夜明しをするきまりがある。庚申様は農作の神といわれ、農作物が豊作になるようなたのむ神で、村々の辻や村端れに石の庚申塔が建てられているのを見ることが出来る。庚申塚のそばに『ツカ』（棒）が立てられ上部の山形の坂に満月と三日月が書かれている。

敬白、夫大宝元年辛丑年正月七日、夷申の日さるの時、摂津の国難波天王寺、民部僧都と申法師の所に、年の頃十七・八の童子来りて、僧都に仰せ給ふ様、我は是帝釈天よりの御使に下り候、日本国に寺多きと云へども、当寺は仏法在所によって、彼の寺に諸々の仏法僧有中に僧都は誠に勝れたる、第一の人にて渡り候間、此事を日本の衆生に伝へ、能々ひろめ給ひ。

夫庚申と申すは、年中に六度なり、庚申待人は、三世の徳有りと云者、庚申の日は、南方に向て、棚を結び、水わあび、身を清め、あたら敷衣装を着して、申の時より可奉待也。

帝釈天の志めしには、庚申待人の名を記し、三重七宝の塔に納めらるゝなり。高さ一重面と云々、一重は過去の咎を減し、二重は現世の願を満し、三重は後生にて仏果を得、此塔に居住する也。

然るに人間は、過去の科深きにより、今生にての悪念あり。如何なる国王、大臣、高家、貴賤上下、僧侶、男女、宮社か、われもおもむき願あつて、愚痴なる故に、ならくに沈むなり。

帝釈天は、夷人待人の名を記し、焰摩王に告げて日どうり、天上の聴衆也。現世後生の諸願叶へ給へと誓給ふなり、焰摩王是を聞給い、貴財善哉とて、三度礼拝し給ふなり。故に夷申待時は、南方に向て香花燈を明し、百味の飲食菓子等供へ申す可なり。

夜半には円物を供へ、曉には赤飯を供へ、諸々の食物、酒なども可奉也。夷申の夜は、男女の寄合もなし、偏に現在の諸願を叶させ給へと可念、ゆめゆめ悪心をおこす事なけれ、菩薩となり給ふべきなり。

庚申待人は、六地獄の咎を逃れる。初めは死山の山、二つには三途の川、三つには無限地獄、四つには餓鬼道、五つには畜生道、六つには修羅道の咎を逃れ、仏果に至る事、無疑と云々。

申酉の時は愛染海、其の時は文珠。子丑の時は不動。寅卯の時は摩利支夫、辰巳の時は葉師。午未の時は帝釈天より下り給いし。此の人の名を記し給うなり。

又日夜半には釈迦如来、青面金剛を念じべし。曉には阿弥陀如来、六観音地藏を念じ奉るなり。これ三界の衆生を、とりわけあわれみ給う本尊なり。

南方に向て三十三度礼拝を致すべし。一切経七千余巻の中に、夷申経に、か様にとき唱ふなり。貴財上下僧侶男女きらいなく、此法を能々待奉る者は、一門眷属、家内安隠、子孫繁昌、息災延命、福智円満無疑と云々、殊に田畑よくなりて、みのらざる事なし。歌に

しやうけふや、いねやさるねの我とこに、ねたるぞ ねぬぞ ねぬぞねたるぞ
かのへさる 大さる小さる 中のさる、男のさるに、まさるさるかな

此歌三辺唱へて 我が齒を三度 さきさきとかみ合すれば、鬼神は恐をなして返る也。

精をば、前三日、三足五辛を食はず。夷申の夜は少しも眠らず慎むべし。例へ重様なり共、一座三年の間に、一度も懈怠無待つべし。一座と申は、三年の内に十八度の度なり。后十八度待申者は、今生の諸願は立所に叶い。猶後生には十八の大地獄の業を悉く逃れるなり。

夷申を待人は如可程も、夫々の分限に従い、米銭おしまず、一夜に三度の供物を備へば、是則過去現在の三世の客となつて、来世には七層倍にて受取る也。

毎日諸行無常是生滅法生滅々已寂為生と信じ、堅固にして百辺も千辺も唱へし。則三病を逃るるものなり。三病は穢い病、愚痴病、餓鬼病、其外火難とうぞく、がうてき、呪咀、ちからぶく、殺害諸々の病の難を逃るるなり。

此旨能々国々に弘め給い。天竺唐土も此法を専ら信仰するなり。されば、童子返り給へば、丑寅に声あつて、今の教を聞くや否と、さもおそろしく聞くなり。夫から民部僧都は、諸国人ひろめ給ふなり。年中に六度、八専ある此名梵天にて大法事あるなり。八専に八月夷申あれば、日とうり天にて、御説法ある故に、下界の大小の神祇、三宝の諸天此法事を聴聞仕給ふなり。故に天摩外道は道にあり、便を待請、悪念をいましめ念をさせざるなり。たいてんなく待申輩は、壹万部の経を誦誦する功德にも勝れたり。上下萬民共に供物を入奉るべきなり。

待申者や、庚申の夜食物を惜しめば貧になり火難に遇なり。必少しも眠事なけれ、三年の間の供物は、諸々の善根にも勝れたり。身心清浄にして待給はば、一切の諸願成就皆円満々足疑無能々信心致可奉待者也。

三界萬靈六親眷属七世父母為二親兄弟仏果 提子孫繁昌祈所敬白 延享三丙寅年正月二十五日書写

喜良市 持主 伊丸岡 祐正

習字原本之写持主 嘉瀬村鳴海善右工門

紙上答論ゼミナール

個人によって、物のとらえ方、考え方、感じ方が違うのが当然のことである。郷土を探る会員それぞれに、異論異説が出されて、私達ふるさとを探る会の議題となり、会も愉快になってきた。それで次の問題を会員に提起した。読者の皆さんも一諸に考えてみましょう。

空論も空論でなくなる。それは想像することが歴史を探る目には必要なことであるからだ。

企画・構成 木下清一

正史では、平泉の奥州鎮守府将軍藤原秀衡文治三年（西暦一一八七年）死す。秀衡の第二子泰衡に兄頼朝より義経追捕の宣旨が下令。

文治五年（西暦一一八九年）四月義経泰衡に襲われ、衣川の館で自殺。時に義経三十一才。これが歴史上の定説とされ、異説では（伝承）

義経は衣川で果てたのだろうか？

① 文治三年（西暦一一八七年）義経、兄頼朝に追われて奥州平泉に入る。

② 文治四年（西暦一一八八年）二月二十一日頼朝藤原泰衡に義経追討の宣旨を下令。義経一行東街道を北行、黒森山にこもる。

③ 文治五年（西暦一一八九年）四月三十日泰衡、衣川の義経を襲う。平泉高館にて杉目太郎行信、義経の影武者とし討死す。

④ 建久二年（西暦一一九一年）義経一行黒森山から宮古浄土ヶ浜より海路八戸に上陸。高館に居をかまえるが、建久五年（西暦一一九四年）八戸を発ち、夏泊半島に向う。建久六年（西暦一一九五年）義経一行三厩村龍飛岬から蝦夷松前に渡る。

となっていて、伝説では



義経一行はさらに沿海州に渡り、蒙古に至り、蒙古を征服、その地の太守となり、その後裔がジンギス・カンであると伝承され、ここ津軽の地でも、喜良市の馬ハゲは、義経一行の馬の足跡で禿とし、また文治四年四月十八日付け（鳴海家所蔵古文書）で弁慶が借用証文を書いているところから、あなたは、義経主従が衣川で果てたという定説と、松前にのがれたという異説を、どちらを正解とするか、あなたなりに歴史的観点から、独断で述べて下さい。

木村治利

沢田 薫

決論から言う。義経は衣川で果てている。然らば、なぜ東北地方

に連綿と、その義経の足跡が残っているのかと疑問が出る。

昔から、『判官びいき』と言う諺がある。これは九郎判官義経のことから生れた諺である。悲運の名将義経を憐れみ、悲しみ、同情し、それが今では、弱いもの、味方の意味と解釈されている。弱いものに味方をしたい、弱い立場の民衆の願望が、悲運の義経を生かしておきたい、義経の名を借りて夢を持ちたい、そこから義経の生存説が出てきたと思う。

然らば、義経の足跡説はどうなるのか？、人の世は、現代でもあること、有名人となった悲運の人義経の名を騙って、義経主従であると生活のため巡り歩いた人達があったのではないか、その人達は、書も出来て、弁説も出来た武士の裔の誰か？、噂だけで義経を見たこともない、無学な東北の住民が、人を疑うことを知らず、そのまゝ、信じんじたとしたら、あり得ることである。

源頼朝が弟義経討伐を命じたのは、文治一年十一月（西暦一一八五年）であった。

義経は頼朝の追及をのがれて、畿内各地を転々とした末奥州に下り往年の庇護者藤原秀衡のもとに身をよせたが、秀衡の死後、頼朝の威嚇に屈した泰衡の襲撃をうけて、衣川の館で自殺した。とき文治五年四月（西暦一一八九年）義経三十一才であった。同年義経を殺させた頼朝は、自ら大軍を率いて、奥州に遠征して、泰衡を滅した。これが正史だと思う。

義経は生前その戦功の華々しさや、節度ある行動などによって、京都貴族からも賞賛と同情を得たが、死後は、その波瀾に富んだ生涯、ことにその悲劇的な末路は期せずして、人々の同情をよび、そこから彼を英雄視する多くの伝説と文学が生れた。（判官物語・義経物語）奥州をのがれて蝦夷地（北海道）に渡り、のち蒙古帝国の祖、ジンギス・カンになったという説は、史実に根拠のない義経伝説の一つにすぎないと思う。

Ⅱ『鹿の子沢の弁慶石』Ⅱ 小田川山国山林の鹿の子沢流域に、旧牛馬道があつて、この牛馬道は、古くから東津軽郡内真部（現青森市）に通じて、喜良市と往来したものと云われている。

この鹿の子沢の支流になる舟巻き沢に、屋根の形をした屋形森という山がある。この山は馬ハゲの近くにある山であるが、この山の頂上に弁慶が担ぎあげたと云はれている巨石がある。その名も弁慶石である。

この巨石、二畳程の広さに、高さが七・八尺はある。いかに超人的な怪力の弁慶がもつても、この巨石、担ぎあげられるものでないことは想像に難くない。

津軽南部各地に義経にまつわる諸説が残されているようであるが、この地にも、昔語りにも、義経弁慶主従が三馬屋への途、この地を通つたことになっているが、この弁慶石の説をもつても、土地の人の創作になるものとしか考へられない。

私は衣川以後の各地に残されている義経説は眉唾ものとしか推理出来ないのである。

義経生存説をとる。壇の浦の戦で勝利を収めた歴史的事実からも、義経は海流、海洋について明るい武将と考えられる。衣川で簡単に果てる年齢でもなかったし、泰衝如き凡将に討たれる義経でないと思う。陸路岩手県釜石に入り、海路八戸に渡り、八戸から夏泊、三厩を経て松前、そして沿海州蒙古と、騎馬戦術で大陸を自在に席捲したと見

るのが、私の考える義経の姿である。

喜良市マハゲ、鳴海家所有の古文書等は文治四年という年から考へてマユツバものと思われる。陸路を辿つたならいざ知らず、夏泊半島から、海路三厩に至つた順路から見た場合、現在の北津軽に足をのばしたとすることは、松前に行く義経が踏み分ける道がないと思う。沿海州から騎馬戦にたくみな義経の蒙古平定は、そこから始まつたと考へる。

平泉から三陸海岸に出る岩手県に多い義経の足跡、そして海を伝つて流れた義経の拠点を見る時、衣川で果て、居れば、釜石、八戸、三厩に、義経の名が残るいわれがないと考へる。

義経は衣川にて戦死しました。衣川では実績がありますが、他には実績はなく、信用出来ないと思われます。

義経が衣川で果てたといわれているが、果してそうであろうか。智勇に優れた武将として、兄頼朝の猜疑心の強いねたみから、討手に追われる身になった義経主従が、そう簡単に、衣川の戦いに敗れ、討ち死したでしょうか。

文治年代の地形と、現在の地形とは、河川の流れの変遷によって、大分違うようだといわれていますが、目先のきかない泰衝の居城と、義経の居城との距離は、数百米と、それほど離れていたわけではなく、川と天然の地形の守備に適した館であれば、如何なる奇襲を受けても

そう簡単に討ち取られはしないではないか。

藤原秀衝を頼って平泉に着いた時は、十名たらずの主従であつたらうが、後に義経を慕いし郎党が、義経の館に馳せ参じて、泰衝に攻められた時は、館の規模からみて、少くとも百数十名の家来が集結していたのである。当然、兄頼朝による追討の宣旨の情報も掴んでいただろう。多勢に無勢の兵力の差からいって、一戦を交えながら後退した後、県内に入ったのではないか。

義経の首級が、当時としても真夏のなかを四十数日を要して、鎌倉幕府に運ばれたのもふにおちないし、弁慶の立往生も、理屈からいって、変り身の藁人形である。

県内のあちこちに義経の足跡、名所が散在していますが、もちろん為政者の足跡ではなく、仮りの寝屋の足跡で、新天地を求める過程の一時の現影ではないだろうか。

私は、断じて義経は、衣川で討死、ないしは自決したものではないと思う。

義経は泰衝に襲われ、衣川の館で自殺。義経三十一才。歴史上の定説は疑問である。

義経が戦さのうまさとは定評があり、また奥州各地に義経の足跡や、伝説のある事は、衣川の館で自殺す、とは考へられない。

もし歴史上の定説が正しいとすれば、役者のうまい人が、義経になりまして、各地を渡り歩いた事になるが、義経は戦いをしてても当時の武将の誰も驚く程の頭腦的な戦いをした。それが三十一才という

若さで自殺し果てる訳がない。

義経の首を鎌倉に持ち帰つたと云うが、本当でなく、その裏工作は実に義経らしく、義経が、浄土が浜から高館へ、夏泊半島そして津軽半島。津軽半島は山越えをして西東。と足跡があるようで、私はその後松前に渡つたと決論づけるが、蒙古に渡り「ジングスカン」うんぬんは疑問に思う。

源氏の末路のはかなさと併せて、義経が衣川で果てたということは物語り軍史を定説とす、義経を生かしておくことにより一層の生きるはかなさ、人間葛藤の流転から、私は義経が衣川で果てたりとしたい。

また義経は、治承四年十月（西暦一一八〇年）兄頼朝と黄瀬川で対面以来、寿永三年一月（西暦一一八四年）宇治川で義仲軍を破り、寿永三年二月、一の谷の奇襲。元暦二年三月（西暦一一八五年）屋島壇の浦の戦いで平家一門を滅亡に追いやった。この二年間の義経の華々しい軍略ぶりを併せて考へるとき、義経ほどの軍略家が、はかなく衣川で果てるだろうか？

一部の学者は、義経が二人居たという説をしている。壇の浦は武者としての影の義経、院の昇殿を許される表の政治家の顔の義経と、二人義経とすると、義経生存説から伝説が生れ、より小説的になる要素が生れておもしろいが、表の顔の義経は衣川で泰衝に襲われ自害したと私は独断したい。

とすると、建久二年（西暦一一九一年）、三厩から松前に渡つたとする一行とは、衣川で果てた義経の遺児主従の一行が津軽に落ちてき

たのであると解することを正論としたい。その理論の根拠とするところは。

弘前市の船沢地区、中別所にある板碑の一基に、正応元年子戌七月三日（西暦一二八八年）源光氏敬白と銘のある板碑と、義経遺児主従一行を結びつけるとき、源光氏、または源光は、文治五年（西暦一一



喜良市娘と嘉瀬若者 または喜良市若者と 嘉瀬娘の源流は……

木村 治利

『東男に京女』ということわざがある。男を選ぶなら江戸の男、女を選ぶなら京の女にしたいという、お国自慢のことばである。東男は昔の東夷といわれた野蛮人ではなく、江戸の文化に洗練された男で、きつぷはいいが、少々おちょこちよいの男に、表はやさしいが芯の強い京女ということであろう。このほかに、『南部男に津軽女』など、この種のお国自慢は各地に数え切れない程ある。

『喜良市娘に嘉瀬男』も、お国自慢のことばであろう。ちなみに嘉瀬男は口は重い、力もちで、働きの者。喜良市娘は、器量よしで、しつかり者が多いということかも……。

日雇生活者の小きれいにしている若い女の子は、嘉瀬の毎日野良仕事に出ている娘達より美人に見えた。喜良市娘からはまた、水田を分けしてもらっている嘉瀬の若者達が頼しく、軍人、警察官と村から出て行く自分達の村の若者より、男を選ぶには嘉瀬の若者が数段立派な感じがした。距離的にも近く、いつかそれが結婚の交流で嘉瀬と喜良市の男女関係が生まれた。私はそんな愚考で、嘉瀬男に喜良市女を見る。

原田 万治

嘉瀬男に喜良市女。またその逆でも、未婚既婚を問わず、実際の多いことをさしているのだろう。どちらかと云えば、喜良市の女は、嘉瀬の女に比べて、性の解放観念が強く感じられる時代があった。ところで、私は、嘉瀬男に喜良市女のことを主としてのべてみたい。

このことに類似して、青森県で有名な言葉に、相馬男に目屋女という、美しい言葉がある。表面上の解説では、目屋は美女、相馬は美男が多く、それらの美男美女の結び付きがあるからに聞えているが、実態はもっと人間臭さの様相を帯びている。

このことで、旧弘前市内の女性の方々に、目屋女性の評価を求めたところ、一言のもとに「目屋女か」と、すぐぶる評判が辛辣で、期待した女性像の評価は返ってこなかった。

喜良市女も、目屋女も、いわば山村地帯で、その地理的条件も似かよい、収益を得る為に、当然山仕事に従事したわけで、今と違って、林道交通の便も悪く、男は山に泊りがけで作業にかかり、かなりの期間家を空けなければならぬ。残された女性は、自由と解放感にひたり、必然的に、一部であろうが、男性を慕え、尻軽な女、博愛主義に

八九年）衣川で果てた義経の遺児または、一族の一員が津軽の岩木山の据野に住み着き、約百年の後、津軽の一つの豪族に育ったと仮説するならば、津軽に義経の血が流れているとしたほうが、蒙古に渡ったとする伝説より、判官びいきの私は、津軽に義経の種は残ったとしたいからである。

私達の幼い頃、よく嘉瀬若者と喜良市娘と男女の交際についての言葉として聞かれたものでしたが、『嘉瀬若者と金木娘』とは言われてこなかった。なぜだろうか、嘉瀬からみて金木は、地理的条件からか、生活条件の違いからか、婚姻関係が多くなかったからなのか。金木が除かれて、『嘉瀬若者と喜良市娘』『喜良市若者と嘉瀬娘』と言われてきていることについて、あなたなりに考察して、あなたの意見としてまとめて答えて下さい。

木立 民五郎

生活根拠を国有林に依存していた喜良市村は、収入源を日雇として生き、西の方に広がる水田稲作に生活根拠をもつ隣り村の嘉瀬は、一つの羨望の姿だった。

随って喜良市村の次三男は、早くから田地を分けしてもらえない将来の見通しから、兵隊志願、警察官等あまり学資等のかからない、官費的職業を選んだ。当時としては、軍人の上級者、警察官の偉い人は近郷では喜良市村が圧倒的に多かった。

その点嘉瀬村は、大した経済的裕福さはなかったが、次三男も分家の場合も、幾らか水田を分けしてもらい、食うに困らない状況下にあった。薪炭材をまとめるため山に入ると、喜良市村の通過が繁く、

富んだ女性に落ち込まざるを得なかった。

砂糖にたかる蟻、発情期の牝犬に群がる雄のごとく、喜良市へ通った嘉瀬の男達、さぞ壮観であったでしょう。

嘉瀬男に喜良市女は、何んと云っても、距離的に近い関係上、交際も多かったであろうし、また同一の仕事の関連性もあったろうし、何にも益して、民度のレベルが似ていて始めて成り立つ要素が、大きかったのではないか。

木立 久二

嘉瀬若者と喜良市娘は、嘉瀬は田畑があり、男衆は夏冬家で自分の仕事をしているが、喜良市は田畑が少なく、村の男衆は年中山仕事で、山子（木材伐採夫）や炭焼きで、山に泊り込みが多く、村内には女・子供・年寄になり、村の中で仕事をしている嘉瀬の若者が、喜良市に通い、年頃の若者と娘の交流となっていたのではないか。

また嘉瀬は、夫婦共に働らく事や、田畑があるので、嫁にやるのは嘉瀬が良いと、娘を持つ親達が、ひそかにそれを願っていたのではないだろうか。

そう云う事もあって、嘉瀬から喜良市に足を運ぶ回数が多くなり、他村に行くより気嫌のいらぬ喜良市娘の、どことなくサバケでいる処に魅力を感じている間に、嘉瀬若者と喜良市娘が出来たと思う。

小山内 嘉一郎

二十数年の前の話だが、金木の古い役所庁舎の一室で、今は亡き喜良市の三上恭太郎さん（当時教育委員会勤務）が、私を相手に雑談、